

あどるせんす

千九百九十九年 十二月三十一日、  
あの日の夜 ぼくは世界が滅びる瞬間を夢見て  
姉さんとともに夜更かしをしていた

豊の部屋から障子戸をあけて  
硝子越しの夜空を見た

せいかいは暗闇に満ちていた  
みんな誰もが 心のどこかで終わりを願っていた

(ああ、もうすぐこの世がおわります)

結局なにごともないまま  
ぼくは普通に中学を卒業した

いつのまにか  
レコードプレーヤーの針は折れてしまっ  
て  
親父のもっていた井上陽水と  
スザンヌヴェガは聴くことができなくなっ

(ぼくが最後のかなしみでありますように)

高校三年の夏  
大学受験を控えたぼくたちは  
大人についての意味もたいして知らされないまま  
生き続けることを急かされるように  
8月の空を歩いた



浮島



一つのC

今まさにC14が一つ減り一つのCも始まっていく

屋根よりも高く飛んでくもの全てこいのぼりへと変わってしまった

少年が青年になる瞬間にウオークマンの卵が割れた

泡のよう透明だった心にも諭吉の視線刺すほど快感

パソコンが太陽を向き祈ったら僕らの寿命あと一万年

落波

無責任 二十号  
責任者 清水らくは(落波)  
副責任者 浮島  
写真 紫野  
発行 無責任. zone